

2019年 JACD 冬の例会のお知らせ

～JACD・咬合療法研究会九州支部合同例会～

会員の皆様、お世話になっております。

12月例会は、JACD と咬合療法研究会九州支部の合同例会となっております。

皆様お誘いあわせの上、ご出席頂きますようお願い申し上げます。

また、例会終了後忘年会も行う予定です。こちらにも是非ご参加ください。

令和元年12月15日（日）

時間：10時00分～16時10分予定

場所：JR 博多シティ 9階 会議室3

福岡県福岡市博多区博多駅中央街1-1JR 博多シティ 10階（092-292-9258）

忘年会

時間：16時30分より 会費：5000円

場所：シャトーハンテン（華都飯店）

JR 博多シティ 9階（くうてん）

タイムスケジュール

10：05～10：45 せと歯科医院 瀬戸泰介先生 座長 中島稔博先生
「CTを活用した歯周組織診断を考察する」

10：45～11：25 岩城歯科医院 下坂満先生 座長 岩城秀明先生
「マイクロネイティブ世代の臨床への取り組み～隣接面窩洞におけるCR充填～」

11：25～11：35 休憩

11：35～12：15 山手通り歯科医院 富山明尚先生 座長 坂田輝之先生
「咬合基本治療により顎位・顔貌・全身姿勢が改善された症例」

12：15～13：20 昼休憩

（※役員会を行います。役員の方のご出席をお願い致します。）

13：20～14：00 友岡歯科医院 友岡和紀先生 座長 筒井祐介先生
「歯肉縁下う蝕に対して矯正的挺出を用いた歯冠修復処置」

14：00～14：40 東松戸駅前歯科医院 金田喜正先生 座長 長田耕一郎先生
「左右すれ違い咬合症例に治療用義歯を用いて咀嚼機能を向上した1症例」

14：40～14：50 休憩

14：50～16：00 きのした歯科クリニック 木下俊克先生 座長 樋口琢善先生
「GBRのトラブルを考察する～エビデンスと臨床のはざまにあるものは？～」

※来年は包括学会が7月開催（北海道）のため、例会日程を変更致します。

JACD 春の例会 2020年4月12日（日）

日本包括歯科臨床学会北海道大会 2020年7月4（土）5（日）

JACD 冬の例会 2020年11月29日（日）

○せと歯科医院 瀬戸泰介先生

「CT を活用した歯周組織診断を考察する」

歯科用 CBCT は、従来の医科用 CT と比較して低被曝で顎骨内の構造が三次元的に把握できることにより、近年急速に一般歯科医院にも普及してきた。

特に最近ではガイドドサージェリーやデジタルデンティストリー等に利用され始めているようであるが、当院では 3 年前に歯科用 CBCT を導入し、歯周治療のツールとして活用しようと試みている。

具体的には、まず歯周治療時に破壊された歯槽骨を三次元的に把握し的確な診断を行うこと。そして次に、その病態に適した術式を選択すること。最後に、その CT 画像を患者への説明に使用し視覚的に訴え、治療の同意を得ること。それらにより歯周治療時における診断からインフォームドコンセント、動的治療がよりスムーズに行えるようになったと実感している。

今回はそのような当院における取り組みを供覧していただき、忌憚のないご意見を伺いたいと考えている。

略歴：2002 年 3 月 九州歯科大学卒業

2002 年 4 月 同大学口腔外科第二口座入局

2003 年 7 月 ソフィア歯科クリニック勤務

2005 年 8 月 白石歯科医院勤務

2012 年 11 月 せと歯科医院開院

所属：日本顎咬合学会会員、日本臨床歯周病学会会員、日本包括歯科臨床学会会員、北九州歯学研究学会会員、若手会会員、上田塾塾生、歯科臨床追研究会会員、WNT 会員、みにかい会会員

○岩城歯科医院 下坂満先生

「マイクロネイティブ世代の臨床への取り組み～隣接面窩洞における CR 充填～」

近年、デジタル機器は目まぐるしく進化を遂げている。

生まれながらデジタル機器に囲まれて育つ世代を”デジタルネイティブ世代”とも言われている。かくいう歯科機器の進化も目まぐるしく、以前ではなかなか導入している医院が少なかった機器も、今や各医院当たり前に備わっているという状況になりつつある。

CAD/CAM、CT、そしてマイクロスコープ。“歯科界三種の神器”とも言われるこれらの機器も、導入している医院が増え日常臨床に活用している事例を多く見かける。

研修医期間を含めても臨床経験 4 年目である私ですが、医院にマイクロスコープが導入されてからは、日常臨床において歯内治療だけに留まらず、支台歯形成、外科、はたまた TBI にと自由にマイクロスコープを使わせていただき臨床経験を積んで参りました。特に隣接面窩洞における CR 充填には無くてはならないツールとなっております。

“マイクロネイティブ世代”として、医院のマイクロスコープを如何に活用しているかお話しさせて頂きたいと思います。

略歴：2016 年 3 月 九州歯科大学卒業

2016 年 4 月 九州歯科大学 顎口腔欠損再構築学分野 研修医

2017 年 4 月 岩城歯科医院(山口県下関市) 勤務

所属：日本顎咬合学会、上田塾、樋口塾

○山手通り歯科医院 富山明尚先生

「咬合基本治療により顎位・顔貌・全身姿勢が改善された症例」

歯科の二大疾患は、う蝕と歯周病である。しかしながら、咬合を考えないと患者の訴える症状を快方に持っていけないことの何と多いことか！

歯周治療には周知のとおり、歯周基本治療がある。

ところが、咬合に起因すると思われる症状を患者が訴えている場合、何をどう手をつければいいのか分からなく、何となく削ったりスプリントを入れたりあるいは経過観察という選択をして、症状を改善できないままになり、患者の状態を崩壊の方向から治癒の方向へ導いていけない事になる。

そのためストレスなどにより、安定した状態から逸脱してしまうと、歯周病の増悪、歯牙ハセツ、修復物の破損、顎関節症の進行など、また様々な全身症状などが起こり、取り返しのつかない状況になってしまう。そこで、咬合基本治療が必要となる。

咬合基本治療の第一段階で7～8割（8～9割か？）は、患者を快方に持っていけるという筒井先生の言葉に励まされる臨床の日々である。

多くの歯科医師がマスターしないといけない治療であろう。

本日は顎位、顔貌、全身姿勢の改善した症例を示し、咬合基本治療の有効性を示したいと思う。

略歴：1995年 鹿児島大学歯学部卒業

関西・関東で勤務医

2003年 北九州市にて山手通り歯科医院開業

2007年 医療法人恵尚会設立

所属：日本包括歯科臨床学会、咬合療法研究会、JACD、日本顎咬合学会認定医

日本外傷歯学会認定医

○友岡歯科医院 友岡和紀先生

「歯肉縁下う蝕に対して矯正的挺出を用いた歯冠修復処置」

最終補綴装置を装着するためには、補綴治療前に口腔内環境を整備する必要がある。それにより、補綴治療が進められ、適切なマージン設定、支台歯形成、印象採得が可能となることが重要であると考えられる。今回、不良補綴物による2次う蝕が多数歯に認められた患者に対して、補綴前処置として矯正的挺出を用い歯の保存を試みた。その後、プロビジョナルレストレーションにて、調整、再評価を繰り返し最終補綴へと移行し、修復材料として、強度や歯周組織への影響を考慮し、ジルコニアを用いて修復治療を行なった症例を提示させていただきたい。

略歴：1995年3月 福岡歯科大学卒業

2000年5月 友岡歯科診療所勤務

2018年7月 友岡歯科診療所継承

○東松戸駅前歯科医院 金田喜正先生

「左右すれ違い咬合症例に治療用義歯を用いて咀嚼機能を向上した 1 症例」

症例の概要：44 歳の男性。上顎義歯の破損および咀嚼障害を主訴に来院した。左右すれ違い咬合であり、現義歯が安定せず前歯部で咀嚼するため、たびたび現義歯が破損していた。上顎は 2 歯残存であった。上顎は残存歯抜歯後全部床義歯を製作、下顎はクラスプを支台装置とする部分床義歯を製作し、それらを治療用義歯として用いてリハビリテーションを行ったのち、最終補綴を行った。

考察：すれ違い咬合により咬合位の不安定や習慣性の偏心咬合位が生じ、口腔機能障害が生じる。まず、少数歯残存による左右すれ違い咬合を全部床義歯にすることで解消し、さらに治療用義歯として咬合位の変化をプレスケールで評価することで機能回復を確認しつつ、安定した咬合位を求めることにより良好な結果になったと考えられる。

結論：左右すれ違い咬合症例に対して上顎を全部床義歯とし、さらに治療用義歯として適切な咬合位を求めることにより咀嚼機能および満足度が向上した。

略歴：2001 年 日本大学歯学部卒

2005 年 東京医科歯科大学大学院 第 2 口腔外科博士課程 修了

2008 年 東松戸駅前歯科医院開院

所属：咬合療法研究会

○きのした歯科クリニック 木下俊克先生

「GBR のトラブルを考察する～エビデンスと臨床のはざまにあるものは？～」

日常臨床においてインプラントは治療のアイテムとして特別なものではなくなった。患者からのインプラントの希望も増加し、骨欠損の状態により GBR を施術する機会も多くなった。

GBR・インプラントにおいてはその術式や、使用する移植材、メンブレン等における研究が進み、その術式は確立された感がある。しかしインプラント治療のコンセプトにのっとって治療を進めたにもかかわらず、期待通りの結果を得られず難渋することも経験する。それは炎症によるものではなく、口腔周囲筋の力に対する審査・診断が無く、術直後に手術部の安静が保たれなかった事に起因していることが多い。今回は、トラブルに遭遇した GBR・インプラントのケースを提示しその原因と問題点について述べる。また、GBR・インプラントを施術したもののインプラントが生着せず除去したことをきっかけに、口腔周囲筋の力を考慮して審査診断を行い、再度インプラントを植立して全顎にわたる治療を行い、10 年後の現在も良好に経過している症例を提示し、諸兄の教えを乞うものである。

略歴：昭和 33 年生 本籍：福岡県

昭和 59 年鹿児島大学歯学部卒（1 期）

平成 3 年北九州市小倉南区にて開業

平成 7 年～筒井塾インストラクター、講師

平成 27 年～九州歯科大学臨床教授

所属学会・勉強会：

日本口腔インプラント学会、日本顎咬合学会（認定医）、日本臨床歯周病学会（認定医）、日本矯

正歯科学会、日本包括歯科臨床学会、JACD、咬合療法研究会（認定医）

論文：

「ヘパリンカラム BMP-コラーゲン複合体による異所性骨誘導に関する研究」

日本口腔インプラント学会雑誌 第9巻 第1号（平成8年3月31日発行）

「パラファンクションを考慮した咬合治療の実際」

デンタルフロンティア QA16号 2001年（デンタルダイヤモンド社）

「パラファンクションを考慮した咬合治療の実際」日本顎咬合学会誌 vol. 24No. 2・3、2004年

「咀嚼運動から捉えた咬合治療の実際」日本顎咬合学会誌 vol. 27 No. 1.2 2007年

「原因不明の咬合崩壊 重大な破壊因子である態癖の見落とし」

補綴臨床 別冊 力を診る {歯列を守る力のマネージメント} 2012年 医歯薬出版

「—2症例の長期経過から考える—長期安定に必要な機能運動の理解」

日本包括歯科臨床学会誌 第1巻 第1号 2016年

出版物：

態癖—力のコントロール（2010年11月10日発刊クインテッセンス出版）（共著）

「局所的組織破壊改善における力のコントロール」

DVD：筒井昌秀の臨床 DVD 全三巻（2008年クインテッセンス出版）

解説者として参加